

MANA—essay,interview

宇田川信治さん 浦安市舟大工保存会 元会長 →[Profile](#)

うた せ ぶね

東京湾に打瀬舟が走った



2004年10月30日、浦安沖の東京湾で建造なった
打瀬舟が走った Photo by 黒住圭樹(C)

千葉県浦安市では、山本周五郎「青べか物語」に描かれた浦安の漁師マチの歴史・文化や漁業民俗を現代に伝えるための事業を幅広く行ってきた。平成十三年に浦安市郷土博物館が設立・開館後は、同館がこの事業を担い、常設展示・企画展示や、復元建造したベカ舟や投網舟に市民が乗船できる体験企画、海苔すき体験、郷土料理教室などの市民参加企画を実施している。こうした事業のひとつとして、浦安の漁業を支えてきた木造船の復元建造のとりくみがある。舟大工の技を現代に伝え、後世に残すために、浦安で長い舟大工経験をもつ宇田川信治さんが親方(リーダー)となり、ベカ舟から始まり、打瀬舟、投網舟、伝馬舟など十隻にのぼる木造船を復元建造した。

今年の五月、二隻目となる帆つき引き網漁船の打瀬舟「浦安丸」が完成し、十月三十日には、東京湾で帆を立て、帆走する勇姿を披露した。舟大工・宇田川信治さんに木造船建造のワザとその心を語っていただいた。

●うたがわ・のぶじ profile

昭和4(1929)年生まれ。千葉県の漁師町・浦安に二代続く舟大工「勤兵衛」の養子となり、舟大工修業ののち26歳で三代目勤兵衛として独立。浦安地区の漁業権全面放棄にともない舟大工を廃業するが、1990年代に入り市の教育委員会からの依頼でベカ舟の復元建造を再開する。95年浦安市舟大工技術保存会を結成し、会長となり、ベカ舟、打瀬舟、投網舟、ウナワ舟などを建造、後継者育成にも力を注ぐ。現在は、会長を弟の彰氏

091205: 東京湾の社会学(中島 満)テキスト2-7

に譲り、相談役として、舟大工の技術と心の伝承に情熱を燃やす。

印旛杉の巨木に血が騒ぐ

Q—浦安市の教育委員会から、ベカ舟を復元するのに力を貸してほしい、と依頼されたとき固辞されたと聞きました。

舟大工「勘兵衛」として最後の舟を作ったのは昭和四十七年でした。その後、舟大工を廃業して弟の会社に勤め、その後、木場の自動車教習所に勤めておりました、いまさら、ということもありましたし、仕事場に迷惑をかけてはと思い断ったのです。

Q—宇田川さんに、やろう、という気を起こさせたのはなんだったのですか。



当時の教育委員会で浦安の象徴となっていた“ベカ舟”の復元を企画担当されてきた永井さんから、「いまや幻となったベカ舟を復元できるのはあなたしかいない」とか、それはまあ、とにかく熱心に、情熱的に口説かれてしまったのです。口説き文句のなかには「お孫さんに舟大工の仕事をする姿をみせたくはないですか」。殺し文句でしたねえ。

それと、実に周到な準備をされて、当時としても貴重な原木の調達を早くからされておりました。舟大工の大切な仕事に材料となる木を見る眼があります。わたしは、“ジボク”と呼んでいます、千葉県内のよい木が少なくなってきたんです。印旛杉が、海で操業する木造船の建造には、脂分が適度に含み材質として一番よいと思っています。この印旛杉の材質に似た香取の杉を、博物館ではすでに調達しており、それを見たとき、これほど準備周到に計画しているのなら、できるなあ、やってみようと思ったのです。

Q—博物館内に、その原木を切り出したときの切り株の切断材が展示されていますね。

あの原木は、平成十二年に一隻目の打瀬舟を建造した時に調達したのですが、惚れ惚れとする杉の巨木でした。わたしらは、山にはえている木を、乾燥させ寝かせて使用できるようになる期間を考えて一年、二年前から、メボシをつけておいてヤマヌシさんに交渉しておくわけです。

木の大きさをいう場合に、立っている目の位置の高さの木の胴回りを測ってメウリ何

091205: 東京湾の社会学(中島 満)テキスト2-8

尺と表現します。

この木は、わたしが理想とする印旛杉で、メウリが一丈(十尺)(約三メートル)ある銘木でした。交渉したら、はじめはケンもほろろで断られたんですが、わたしが、浦安の舟大工の技を後世に伝えるために必要なんだということを、理解してもらって、山を売るときに、一本杉のまま残しておいてくれたのです。

伐採の現場に立ち会って、切り株となったときの材質のよさと巨木さに舟大工の血が騒ぎました。

ウナワ舟ってどんな舟？

Q—舟を作り始める前から舟大工の仕事ははじまっているのですね。

そういうことです。舟大工の中には何十年という期間舟を作り続けるだけの木材のメボシをつけておく人もおるぐらいですから。とくに、この木はみごとなものでした。年輪から樹齢二百八十年ということがわかりました。舟大工冥利に尽きるような銘木との出会いです。これだけの大木ですから、板にするコビキの作業ができるのは木場でこの人だけといわれた名人にお願いしました。

コビキをする人も木の心をわかって材木に仕上げしてくれるから、長年使用に耐える漁船ができるわけです。舟大工の仕事は、まずよい木があって、よい材木にしてくれるコビキ名人がいて、舟クギを打つ鍛冶屋さんがいて、みんな、木に合わせて心を一つにして初めてできるんですね。

Q—これまで何席復元建造を手がけられたのですか。

まず1隻目がベカ舟でした。ベカ舟は、海の上の自転車みたいな役割をする小型の舟でしたから、建造には1週間もあれば1隻できます。その後も、技術伝承のために一隻と、地元の中学校の生徒たちに「君たちにだって作れるんだよ」ということを教えながら、子どもたちと一緒に1隻造りました。ですから、合計で3隻造っています。

次に、東京湾の漁業のなかでも珍しい追い込み網漁の「うなわ舟」を2隻造りました。ウナワ漁は、鶺鴒の羽やそれを模した木片をつけたウナワとよばれるオドシ具を引いて魚を網に追い込むという浦安に長く伝わる伝統漁法です。

091205: 東京湾の社会学(中島 満)テキスト2-9

船型や、漁具の復元には、ウナワ漁の名人だった宇田川廣一さんらの元漁師のかたがたの記憶がたよりでした。わたしも若いころ親方から聞いていたことを思い出しながら、さらに文書資料とつき合わせ、みんなが力と知恵をしぼりながらの共同作業ですすめていきました。人間の記憶なんて当てにはならないという面もありますが、一度造って見せて、ここがこう違うとか、たしかこうなっていたとか、結局は造ってみなけりゃ、よい舟の復元はできないんですね。

1隻目より2隻目になって、「ああむかしのまんまだ」という一声を聞くのが、なんといつても一番うれしい。図面など残さず、記憶と経験だけの世界でやってきましたからね。

元漁民の記憶が頼りの打瀬船

Q—今年になって打瀬船が完成し、十月に走行したそうですね。東京湾を木造の帆船が風に乗って走る。江戸前漁のなかでも名物漁でした。夢をみるようです。

平成12年に打瀬船をまず1隻つくりました。昭和40年代、まだ何隻か操業をしていた1隻引きの帆船が打瀬網船(うたせあみぶね)です。わたしは何隻も造った経験がありましたが、帆のかたち、材質や、引き網の構造、これは漁師さんの記憶だけが頼りです。元漁師さんでつくる「もやいの会」のメンバーのなかでも、打瀬漁(うたせあみりょう)の第一人者で長老の平林道太郎さんの話が大きい役に立ちました。

平林さんは85才で、いまでも櫓を漕がせたら浦安一番ですよ。デバラナイかたで、仲間の信望も厚く、網から漁具まで、手作りできるものは何でもやってこられた方なのです。木造船を復元するというのは、舟大工が技を持っているだけではだめなんです。こういう平林さんのような方がいて初めて完成にこぎつけられるのです。

打瀬船の2隻目を昨年から造り始めました。今度は、1隻目の経験を生かしているばかりか、8馬力のエンジンを使用して、一般走行もできるようにした上で、帆走もできる船型に工夫しました。長さが9.5メートル、幅1.7メートル、約1.5トン。14人乗りです。船型や構造を昔にできるだけ近づけようと、エンジンを目立たないようにするために、エンジン場を低く設計しました。

この舟は、帆走して三番瀬に沖から近づいたり、市民も体験乗船できることを前提に作ってあります。実際に洋上で帆走したり網を引いたりするには、いくつかの課題をクリ

091205: 東京湾の社会学(中島 満)テキスト2-10

アしなければいけません、市民にとっても、浦安の沖合いで帆船が走行するというのは夢のある試みだと思います。

青べか物語と伝馬船

Q—「青べか物語」で山本周五郎が描いた「ベカ舟」は、実は「伝馬船」だったと宇田川さんが話されている文章を読んだことがあります。

そうなんです。ベカ舟は三種類ほど異なった船型があります。何れも、小型で、軽く走行性をよくするために船底が薄く、ベカベカとしなるような舟だから「ベカ」と呼ばれていたんですね。

ところが、小説に描かれているのは、「胴がフクれて、みるからに鈍重」という船型の特徴を持つ舟です。これは、どうもベカではなく、コヤシを運ぶ伝馬船(てんません)(オワイブネともよばれた)のことだと思います。

境川の川べりに2000隻近くびっしりとつながれた浦安のベカ舟のケシキのなかには、そのような伝馬船も含まれていました。ですから、この小説に描かれた伝馬船とノ

リのベカ舟との違いを知ってもらうためにも、昔の通に小説に描かれた記述を参考にし、忠実に復元した伝馬船も作りました。

この他に、投網(とあみ)をうちながら船にお客さんを乗せ、料理を楽しんでもらう遊船を目的とした投網船を1隻つくりました。投網師(とあみし)たちは、船頭でもあり、漁師でもあり、また料理の腕前も一流の庖丁師(ほうちょうし)、つまり料理人でもあったんです。

この投網船と櫓こぎのベカ舟や伝馬船は、「もやいの会」の元漁師さんたちが、操船し、説明役となり、定期的に乗船体験ができる企画が行われており、そのつど家族連れでいっぱいになります。

博物館には、これまで建造された10隻の木造船のほか、建造経過をビデオに納めた資料映像が用意されています。舟大工の仕事場から、道具など実際に現在も使っているものが展示されていますから、ぜひご覧になってみてください。



2004年11月3日、子供づれ家族が宇田川さんが造った投網船に体験乗船した。

091205:東京湾の社会学(中島 満)テキスト2-11

●**エピソード**—浦安市立郷土博物館にうかがい、尾上一明学芸員と一緒に、館内にあるレストランで人気の江戸前郷土料理「あさりめし」をごちそうになった。午後からは、沈んでいた漁船につんでいた焼玉エンジンを同館が修理復元させ、運転のデモが行われた。「焼玉エンジン」運転を始め、この博物館の特徴は、浦安の漁師マチの暮らしを追体験できる催しが盛りだくさん。2004年12月4日から2005年の2月27日まで「のり—ちば海苔いまむかし」の企画展が開かれ、海苔すき実演や体験、ノリ養殖場の見学会などが行われる。市民参加体験型博物館の楽しさを存分に味わわせてくれる。浦安市郷土博物館の住所連絡先は次の通り。

千葉県浦安市猫実1-2-7 (電)047-305-4300

[同博物館のホームページ](#)

インタビューア MANA・なかじまみつる

JF共水連機関紙「漁協の共済」2004年12月号・No.117初出・一部加筆訂正して掲載しました。画像の引用は禁止します。記事の引用転載・リンクについてはMANAまでご一報ください。

[HOME](#) [海BACK](#) [浜に生きるINDEX](#) [20←BACK](#)

[投稿・ご意見はこちらへ](#)

copyright 2002~2009, manabook-m. nakajima

ごだいきぶね
里海は「五大力船」に乗って

木更津市 J F 金田所属・NPO 法人盤州里海の会理事長 金萬智男さん

J F 金田地区組合員総代・NPO 法人盤州里海の会監事 実形博行さん

インタビュー・構成：なかじま・みつる



●プロフィール

きんまん・のりお (写真左) 1959年木更津市生まれ。高校卒業後家業のノリ養殖業・採貝業を継ぐ。98年ネットサイト「江戸前きんのり丸」を設け、ノリやアサリの直販を始め、盤洲干潟や漁暮らしの情報をウェブサイトで流し、市民と交流する大切さを知る。04年NPO盤州里海の会設立、絶滅危惧種アサクサノリ復活計画など斬新なプログラムを提供する活動を続ける。

じつかた・ひろゆき (写真右) 60年木更津市生まれ。家業のスタテ漁「つぼや丸」・ノリ養殖業を経営。金萬氏と小中学校同窓という仲から里海活動に協力、里海の会設立メンバーに加わる。同会監事。スタテ漁の体験学習を立案実施、テレビ出演など広報担当役として活動している。

【リード】

「里海」は、海辺の環境や漁業漁村を表現した新しい言葉としてここ数年よく使われるようになりました。「里海」については、2004年11月号で、高知県柏島の黒潮実感センター・神田優さん、昨年8月号の千葉県海の博物館・菊地則雄さんの記事を通して紹介しましたが、千葉県木更津市 J F 金田所属の金萬智男さんも、漁業者による「海めぐりの里」づくり活動を展開してきました。

今回は、金萬さんと仲間の漁業者で2004年に設立したNPO法人「盤州里海の会」が取り組んできた絶滅危惧種「アサクサノリ養殖復

活プロジェクト」や、海の体験学習の成果について、そして、次のステップとして、里海活動を通して新しい漁業のかたちづくりに取り組む計画について、金萬智男さんと実形博行さんのお二人にお話を伺いました。

——お二人が写る写真は、今年1月15日、養殖復活に成功した「アサクサノリ」の「干し海苔」を浅草寺に奉納した時のスナップです。漁師の祝い衣「万祝」(まいわい)を羽織り仲見世を歩きました。

漁業を応援してくれる市民たち

——「里海」ということばに、どういう思いを込めてきたのですか。

金萬 おれたち漁師は、「海」は稼ぎの場所なので、仕事に行くといえば、目の前の「ギョバ」のほかにはいいようがありません。海という自然を守ろうとか、海辺の環境を大切にと皆さんはいいますが、「自然」も「環境」も実感がわきません。そうかといって、自分らの地域を「漁村」というかといえば、それもしっくりきません。

10数年前に、海苔やアサリを直接販売するネットショップ「江戸前きんのり丸」というウェブサイトをたちあげました。おかげさまで予想以上に好評でした。それまで、漁協漁連を通じて販売していたときには味わえなかった楽しさを知りました。販売して収入を得るだけではな

く、購入してくれた消費者の方々とネットやメールを通じて情報交換しながら、自分らの仕事である漁業や漁場について、消費者の人たちは、もっと詳しく知りたがっていることに気づきました。

こうして、ウェブサイトには東京湾の漁やノリ養殖のこと、先輩漁師から聞いた昔の漁法のこと、盤洲干潟の魚貝や生き物たちのことを発信していきました。海や干潟のことをもっと知りたい、自分で食べたものが育つ海を見たいという声がたくさん寄せられました。

漁連一漁協一組合員という仕組みの中でしか漁業はできないとばかり思い込んできたんですが、もしかしたらすこし違った「道」のたどり方も可能ではないのか、と思い始めました。

コラボレーションとしての里海

——それが「里海」だったのですね。

金萬 言葉の意味より、消費者である市民の人たちに楽しんでもらえて、自分も楽しめる、そんな「漁業」の形があってもいいんじゃないのか。そんなイメージが沸いてきました。漁師が養殖した海苔を、市民に天日干しで板海苔を作ってもらおう。天日干しならぜひやってみたいという声をたくさんの方から伺いました。

老漁師の「アサクサノリをもう一度食べたい」というひと言を聞きました。それなら、やって

みようじゃないか。いまや絶滅危惧種となっていたアサクサノリの養殖を復活させ、そのアサクサノリを市民の人たちと一緒に天日干しし、海苔巻きを食べたら、楽しいだろうな。江戸前アサクサノリ養殖復活計画は、こうして始まりました。専用のウェブサイトには、SATOUMIのことばを使いました。

自分ひとりからはじめ、市民の関心がとても高く、マスコミでも取り上げてくれましたので、仲間が二人、三人と増えていきました。こうして2004年、漁師仲間と水産業者だけを正会員とするNPO法人「盤州里海の会」が設立されたのです。

——なぜ、NPOだったのですか。

組合は地域組織です。なにをやるにも役員会の承認を得ながらでは手間がかかります。それを考えたら、自主的に事業目的を設定できるNPO組織がいいのではと単純に考えました。なにより、漁業者にとって遠い存在の消費者の意見を取り入れることができ、市民にも参加してもらいながら事業を進めるわけですから、組合とは別組織のほうが都合がよいのです。ひとつだけ組織の枠組みを決めました。理事には漁業権者か、組合員に準じた水産関係者に限定しました。

市民に公開して、事業計画や体験教室のプログラムなどの情報を流し、参加してもらうことで活動を支えてもらいます。

つまり、「里海」を自分流に表現すると、新しい漁業の姿を求めて漁業プロジェクトを消費者に提案し、市民に参加してもらい、協働参画型のコラボレーション（共同作業）で、ともに楽しんで交流する場と言えるのかもしれませんが。

市民は、直接漁業を営むわけではありませんが、漁業を体験する「楽しさ」を味わえると思います。そういう楽しいプロジェクトを提案しながら異業種の人々が集う「めぐりの里」づくりが、漁業・漁村の活性化につながるのではないのでしょうか。

地産地消あってこそその「里海」

——絶滅危惧種「アサクサノリ」養殖に成功されたそうですね。つぎに、新しい計画を立てていると聞きました。

実形 おかげさまで、会のメンバー6名が、今年5万枚のアサクサノリを生産できました。計画してから3年目で、第1段階の目標が達成され、ひと区切りつきました。会としては、これまでの活動を基に、ステップアップを図るための二つの方向をとろうとみんなで確認しあったところです。

金萬 今後の展開としては、アサクサノリの増産体制をつくり、地域の地場ブランドとして、



生海苔を加工・販売する流通のしくみづくりに取り組もうと考えています。天日干し海苔製品化をすすめ、海苔問屋や海苔佃煮会社などとも取引を検討しています。

また、独自ブランド商品の開発や販売をすすめるため、会員個人個人が出資して、新たな会社組織か、経済産業省の新制度のもとで認可される有限責任会社・組合（LLP）などの設立についての勉強を始めています。水産庁の「国際水産物新需要創出ビジネスモデル事業」（LLC制度）のような新しい漁業の仕事場作りにかせるものは食欲に利用していくつもりです。

実形 NPO活動によって築いてきた市民の応援体制をいかし、地元木更津市や商工会議所との協力体制もとっていきます。具体的には、東京湾アクアライン木更津側金田高速バスターミナル（東京駅から40分）脇に、大きな駐車場つきの「わくわく市場」があります。木更津市が所有する敷地に木更津観光物産が運営する地場商品を販売する市場ですが、この施設や駐車場を利用させてもらう試みも始めました。

潮干狩りや海水浴シーズンが賑わうだけで、オフシーズンは利用者も少ないため、里海の会の天日干し海苔づくり教室イベントをここで開催させてほしいと申し入れたら、大歓迎してくれました。2月18日に、この場所を使って天日干し海苔作りイベントが行われ、広々としたスペースを使えるため参加者に大好評でした。

「わくわく市場」側も、オフシーズンに100人規模のイベントが行われ、テレビや新聞にも広報されるメリットの大きさに喜んでもらえました。

地域の活性化のため、木更津のまちづくりに貢献できるような地元との協力体制ができればと考えています。

ごだいきぶね 夢じゃないぞ「五大力船」構想

金萬 盤州里海の会としての第2番目の目標ですが、アサクサノリの次に取り組む「復活作戦」には、ハマグリを考えています。ハマグリは全国的に放流事業が「増殖」の主流ですが、盤洲干潟にわずかに生息しているハマグリをどうしたら「生産」できるまでに復活させることができるかの調査研究を本格的にはじめます。

ハマグリ復活プロジェクトをすすめるのに、大切なポイントがあります。それは、「ハマグリを復活させる」のが最終目的ではなく、木更津のかつての名物「ハマグリの佃煮」産業の復活こそが達成目標だということです。地場ブラン

ドの新たな収入源として産業化されて、はじめて地産地消の効果が地元にもたらされることになるのです。

一番目の会社組織設立で商品開発を試みたいものとしては、先ほどお話した生海苔の需要開拓や商品化のほかに、盤洲干潟でとれる未利用の魚貝（シオフキガイ・マテガイ・ムラサキイガイ・イボキサゴやハゼやカレイなど）を考えています。新規需要ビジネスモデル事業の構想名は「ごだいきぶね五大力船」と名づけました。江戸をつなぐ海運・海産流通拠点であった木更津の湊をゆきかっていた運搬帆船「五大力船」のかつての勇士にあやかってつけました。

アサクサノリ復活に6年かかりました。だからハマグリにも6年かけようと思います。金額は少なくとも、新しい地場商品が生まれ、環境教育を取り入れた観光漁業が根付けば、地産地消型の地域の元気な姿が浮き上がるはずです。

(聞き手 中島 満)

プロローグ(1) 実形さんから最後にひと言いただきました。「里海の活動でいちばんうれしかったのは、これまで知らなかった市民のかたがたが楽しんでくれて、自分らの漁業という仕事をいろんな形で応援してくれていることがわかったことです。お台場の小学生たちの海苔干し教室に協力して、小学生たちが、はじめは水に触れるのもしり込みしていたのに、次第に自分の役割分担を自分たちで仕切るようになる

のをみて、つくづく、漁業の仕事をやっていてよかったです。」

プロローグ(2) 今回のお二人のお話からたくさんのお話を教えていただきました。とくに、金萬さんがリーダーになって設立した NPO 法人「盤州里海の会」は、金萬さんや実形さんが所属する金田漁業協同組合という木更津市金田地域の漁業地区を代表する組織では取り組めない市民の応援を受けて実行するいろいろな事業を行っていることの意味は実に大きいと思います。

そして、また、NPO 法人では、行えない営利事業を行うために、グローバル時代に対応した中小規模のベンチャービジネスに取り組む人々を支援する目的で設けられた経済産業省が主管する LLP：有限責任会社を設立しようと準備しています。

漁協が取り組めない事業を漁業権や組合員という資格を持った所属組合員によって組織化された「NPO 法人」と「会社」組織を相互に機能させて地域活性化を図ろうという取り組みにこそ、「漁業・漁村のあたらしい“かたち”」を考えるカギが隠されているような気がします。

copyright 2007, manabooks-m. nakajima,
& Norio. Kinman, Hiroyuki. Jitsukata
& JFkyousuiren

お台場の海で海苔ができた！！

港区立港陽小学校校長 角田美枝子氏

インタビューア MANA (なかじまみつる)



●プロフィール

(かくた・みえこ) さん：

昭和23(1948)年生まれ。
明星大学卒。昭和50年
目黒区中目黒小学校教員
就任以来東京都区内小学

校教員として教育の現場に立ちつづけている。大田区馬込第三小学校教頭、同区田園調布小学校教頭を経て、大田区立千鳥小学校、港区立青山小学校の校長歴任後、平成17年4月に港区立港陽小学校校長就任(現職)。お台場干潟再生プロジェクトとしてアマモの移殖・定殖や、お台場の海で採れた生きものたちを「海水ビオトープ」で飼う試みにとりくみ、本稿で紹介した「お台場海浜公園内の海でノリづくりの実験」を行うなど、地域の環境をいかした環境教育を通し特色ある学校教育を推進している。

[共水連リレートーク原稿(06年8月14日取材)漁協の共済 10月号 リレートーク第81回]

【リード】

東京都港区立港陽小学校は、お台場海浜公園の砂浜と道路を隔てて校舎が建つ。学校の側か

ら見れば、校門のまん前に砂浜があり海が広がるという、まさに「学校の地先が海」の「臨海小学校」だ。開校は平成8年。お台場海の公園周辺に整備されたマンション・団地に入居する“新住民”のために設立された小学・中学併設式の学校だ。

「海が目の前にある環境をいかすために、昔この場所が江戸前の豊富な魚介類の産地であったことを実感してもらうために、この海で海苔ができないだろうか。子どもたちに江戸前の海の姿や生きものに触れさせてあげたい」と考えた、三代目校長の角田美枝子先生の熱情込めたアイデアを聞いた、公園管理者の都や関係省庁、東京湾を再生したいと活動するNPO団体、千葉県木更津のノリ養殖漁業者、都漁連さん下漁協



写真：

子どもたちが家に持ち帰った海苔の袋には「海苔を守ろう—お台場ふっかつ特産海苔」のブランドのシールが貼られた。

有志など、多くの人々が協力して、この「夢」が実現した。

今年3月3日、ノリづくりが成功し、収穫した生ノリを、生徒たちと、父兄・教員・ボランティアの人々みんなで天日干しで板海苔にし、学校生徒全員に、「2分の1枚」ずつ配られた(担当した5年生には1枚ずつ)。「海」の大切さと漁業という「営み」の現場を子どもたちに体験させた「お台場ノリづくり」プロジェクトの計画から実現、そしてその後の影響について、同校角田校長先生にお話をうかがった。

お台場の海をもっと知ろう

——子どもたちにお台場の砂浜にでて海や生き物と接触する、そういうアイデアがどこから生まれてきたのですか。

校舎がお台場の海と眼と鼻の先にありながら、子どもたちにとっては、お台場の海は“身近な存在ではない”という事実が先ずありました。砂浜に出て遊ぶことも少ないですし、地元以外の方は、砂浜にアサリを取りに来ている、ここに住んでいる子どもたちも、その親ごさんも、それを食そうとはしたがりません。これが現実でした。

せっかく、こんなすてきな海浜公園が身近にあり、人工的に作られた公園とは言いながらも自然に恵まれていながら、それに愛着をもてないでいる、ということと、目の前にお台場海浜公園を抱えている学校であるならば、もっと海を活用した教育活動ができないだろうか、と考

えました。

それが、当校の特色ある教育活動になるはずで。その特色をなんとしても作りたい。子どもたちが、誇りに思う学校。自分たちは、“環境”を“保護”することにも貢献しているのだ、というような、誇りを持ってほしい。そして、夢のある教育活動をしたいというのが、一番の根底にありました。

——子どもたちは自然とのつながりをもつ機会が少ないですし、お魚の名前と実際のさかなの生きている姿、食べものと、その食べものが自然のなかに育っている姿があることをなかなか実感できません。

まず、学校の目の前に「海水ビオトープ」をつくりました。そこにお台場の海の生き物たちを入れました。全校児童が、家からペットボトルを持ってきて、お台場の海水を汲んできました。PTAの会長さんはじめ、みなさんがお台場の海に入り、お台場の砂浜に置いた大きなポリバケツに海の水を汲みました。子どもたちが、一人に1本ずつペットボトルで、水を汲んできて「海水ビオトープ」をつくりました。

ここには干潟が作ってあり、そこに、お台場の海で採れたアサリやマテ貝、アナジャコやコメツキガニ……を入れました。岩場も作りました。第三台場の磯の岩を持ってきて、そこに着いていたマガキ、フジツボとか、タマキビガイを名前を調べながら入れました。

子どもたちが、カレイを捕らえてきました。



写真：ついに40年ぶりにお台場の海に海苔ができた。3月3日校舎入り口の海苔干し作業中に生徒と関係者がそろって喜びの「トキ」の声を上げる。(「海辺づくり研究会」提供)

「このお魚入れていい」といいますから、カレーやハゼも入れました。小さな海の世界でしたけれど、これがきっかけになり子どもたちがお台場の海の生き物に関心を持ち始めました。

子どもの関心というのは、ちょっとしたきっかけで、どんどん広がっていくのではないのかなあと子供たちから教えられる思いがしました。

お台場を“見直した”よ

——新しい町ができ、新しいコミュニティーにできた学校で、住居も景観も環境も新しい。

結論のようですが、全校生徒に出来上がったノリを2分の1枚ずつですがあげたのです。そうしましたら、親子で感想を寄せていただきました。保護者の感想の中に、「お台場の海を見直した」「海苔が採れる豊かな海だったのですね」

というのがありました。子どもたちも、お台場の砂浜や海を見る眼がかわったのですから不思議ですね。

——このお台場周辺が、昔は海苔が採れたり、豊かな漁場であったことは、いまの保護者の人たちもいっさい知らなかったのですね。

人口干潟という印象が、美しく、きれいな海という印象を持てなかったのですね。40数年前まで、ここが漁場だったことも知りませんでした。だからこそ今回のノリづくりの取り組みをとおして「見直した」ということにつながったのですね。感想の中に、やっぱり「汚い」という声は、百何十通集まった中に、一人か二人ぐらいだったのです。

海苔が採れたことを、保護者がここまでみんな喜んでくれました。そして、一人当たり2分の1枚だったにもかかわらず、お父さんの出張の帰るのをまって、みんなで食べましたとか、本当に大事、愛しみをもって食べてもらったということが伝わってきました。

みんな大好きな海苔を作ろう

——海苔を作ってみようというアイデアは、なにがきっかけであったのですか。

NPO法人の「海辺づくり研究会」（設立発起



写真：環境教育に協力をする人々のボランティアとしての「協働」事業の意味が意外にも大きい。(アンダーライン)の部分をあえて記しておいた。

人・事務局担当 木村尚さん)の助言が大きかったですね。でも、ここで海苔を作るのはむずかしい、といわれました。ワカメの方がやりやすいのでは、ともいわれました。

でも、お台場の海を汚いと思っている保護者や子どもにとって、そこにずっと浸っていたワカメを食べるか?と考えたとき、海苔だったら食べるのではないか、と思いました。海苔は、引き潮のとき海から浮いてお陽さまの光をあびて、そして天日で乾燥させ作ったものですから、これなら食べてもらえる。

——「海辺つくり研究会」とはどのように知り合ったのですか。

都の環境課のかたから教えていただきました。ビオトープの時からずっと、助言をいただきました。

そして、ノリづくりには、千葉県木更津のN

PO「盤州里海の会」の金萬智男さんたちノリ漁師の方々に協力をいただきました。東京都漁連の方々、都や関係省庁の皆様方の協力がなければ、この計画は実現しませんでした。

こうした方々に校長が加わった「お台場環境教育推進協議会」が作られ、第一回目会合が2005年10月ごろ開かれました。そして、私が会長になり、「港区立港陽小学校」「東京都港湾局臨海開発部(海上公園課)」「国土交通省関東地方整備局東京港湾事務所」「財団法人東京港埠頭公社」「NPO法人盤州里海の会」「NPO法人海辺つくり研究会」の「協働事業」として昨年、契約が締結、ノリつくり事業が行われることになりました。

嗅ぎ触り観て体験した

——環境教育として授業の位置づけは。

「総合学習」といい、週に3時間です。海苔づくりは、5年生全員がおこないました。準備検討をへて、今年の1月13日、砂浜から十数メートルの海にヒビを立て、海苔の胞子のついた海苔網を張りました。作業は、金萬さんやお仲間たち、海辺つくり研究会の方々が、船と海に分かりながらやっていただきました。事前に、海苔はどうやってできるのか、どのように育つのかなどの授業もしていただきました。

子どもたちは、大人たちの協力作業を自分が

参加しているようにとらえたようです。海苔が育ち始めると、海鳥に食べられないように、自分たちが「海苔を守ろう」という気持ちが芽生えて、自転車で休みの日にも“保安”“観察”に通う子供もいました。

こんなお台場のような海では「つくれないんじゃないの？」と疑問に思ってきた子どもたちが、3月3日に、海苔網を引き上げ、そして直接手で、生ノリ摘みができたのです。天日干し場となった校舎の入り口は、海苔の香りがいっぱいになり、生ノリ入りの味噌汁をみんなでいただきました。

子どもたちにとって、この体験は、海の生きものを知る以上に、育たないと思った海苔がついに育った喜び、感動とともに、お台場の海を「見直した」ことで、「誇り」を芽生えさせたことが、何事にもかえられない、とても大きな効果なのだと思います。

ぜひ、この取り組みは、皆様のご協力を仰ぎながら続けて生きたいと考えています。

(聞き手=MANA：中島 満)

追加挿入メモ：

◎参考ホームページ（ブログ）は、
海辺つくり研究会「お台場環境教育推進協議会」
のページ：

<http://umibay.cocolog-nifty.com/photos/odaiba/index.html>

「盤州里海の会」のページ：

<http://www.satoumi.net/index.html>

をご覧ください。

なお、本原稿は、ブログ版 [季刊里海] 通信「2006年10月12日付け」「里海インタビュー（1）」

http://satoumi.cocolog-nifty.com/blog/2006/10/post_6cdd.html

に載せたファイル（ダウンロードできます）としていつでも読めます。

*copyright 2002~2006, manabooks-m. nakajima,
& Mieko. Kakuta, & J F Kyou-suiren*